

Figures



2026年 2 月号 (No.3)

Perdu ce vin, ivres les ondes !...

J'ai vu bondir dans l'air amer

Les figures les plus profondes...

Paul Valéry “LE VIN PERDU”

消えたこの葡萄酒、^{ほのか}微に酔った波……

俺は見たのだ、潮風の^{にが}苦い空の中に

この上もなく深々とした形象の躍り上るのを……

ヴァレリイ「消えた葡萄酒」(鈴木信太郎訳)

目 次

季節を運ぶ風

正義の戦い	2
加藤喜之「福音派—終末論に引き裂かれるアメリカ社会」 を読む	3

ふたりのシベリア

石原吉郎と香月泰男（一）	遠藤雅樹	5
--------------------	------------	---

中島敦「古譚」論 その一

「狐憑」と「木乃伊」をめぐる	角谷有一	11
・「狐憑」を読む		12
・「木乃伊」を読む		19
《参考資料1》狐憑 中島敦		27
《参考資料2》木乃伊 中島敦		31

編集後記	36
------------	----

装画：平尾堇

季節を運ぶ風

正義の戦い

ロシアによるウクライナ侵攻から既に数年が経過したが、和平交渉は一向に進展しない。イスラエルのパレスチナ・ガザ地区への攻撃も終結の兆しは見えない。

世界のどこかで戦争が行われていることが常態化した今日、戦後八十年を迎えた私たちの耳には、実際に戦争を体験した人々の声がほとんど届かなくなるのと歩調を合わせるように、「正義のための戦争」といった、戦争を正当化する言葉を耳にすることも増えてきた。しかし、実際の戦争は、「正義と正義のぶつかり合い」という抽象的なものではない。人を殺し、街を焼き、土地を奪うという、生身の人間を傷つけ、苦しめる具体的な暴力の連続であり、そこに「義」と呼べるものは存在しないと思われる。そして、そのことを自らの体験を通して私たちに語ってくれた世代の人々も次々にこの世を去り、彼らの言葉も聞かれなくなっている。

昨年春に放送されたNHKの朝のドラマ「あんぱん」で、主人公の夫のモデルとされる漫画家、やなせたかしも、戦争体験を語った世代の一人である。彼は終戦直前の中国で悲惨な戦いを経験し、また戦争によって大切な身内を奪われた経験をもとに、「正義のための戦いなんてどこにもないのだ」という強い言葉を残している。

ところで、同じような考えを、百年ほど前に書き残した日本人がいる。元海軍大佐でジャーナリストの水野広徳だ。彼は、急速に軍国主義へと舵を切っていく大正から昭和初期にかけて、国際社会の中で孤立へと向かう日本を憂えて、反戦平和を訴え続けた人物である。日露戦争では、日本海海戦を水雷艇長として戦い功績を挙げたが、第一次世界大戦直後のヨーロッパを視察し、ドイツやフランスの破壊された都市や市民の苦しみを目の当たりにして、軍国主義者から反戦平和主義者へと大きくその思想を転じた。

水野が、大正十三（一九二四）年に『中央公論』に寄稿した、『戦争』一家言』には、多少粗雑な比喻もあるものの、それを補って余りある強い言葉が記されている。

「『正義の戦』なるものは古今東西を通じておそらくただの一つもあるまいと思われる」と。それに続けて、「外交が軍備の力によって支持される間は世界に真の平和は来たらない。外交が正義によって支持せらるるに至ってこそ、はじめて平和を語ることができる。平和を求むる唯一の道は、まず軍備の縮小、つ

いで軍備の撤廃である」と述べている。

その後、水野は、日米が戦えば必ず日本は敗れると警告し、語る場・書く場が与えられる限り軍縮と国際協調を訴え続けた。しかし、言論弾圧が激しくなる中で執筆禁止の対象者となり、敗戦のわずか二か月前、戦争の終結を望みながらこの世を去った。

太平洋戦争を、東アジアを列強から解放するための「聖戦」だとして、その「聖戦」に命を捧げることを求められた時代。そんな時代に、「正義の戦」なるものは古今東西を通じて存在しないという信念を貫き通したジャーナリストが日本にいたことを、私たちはあらためて思い起こす必要があるのではないだろうか。

(乾)

加藤喜之 「福音派―終末論に引き裂かれる アメリカ社会」 を読む

ジョン・フォード監督作品「荒野の決闘」のなかにトゥームストンの街に教会を立てる話が出てくる。その寄付を募るため

街中の人々が着飾って集まり陽気なダンスがはじまり、ワイアット・アープとクレメンタインがその輪に加わって踊る名場面がある。米国に行ったことがなく、アメリカの文学や映画、思想になじみが薄いことも重なって、教会といえは西部劇の道具立てのひとづくりにしか思っていなかった。しかしよく考えてみればうかつな話で、アメリカは信仰の自由が建国の理念であり、週末に教会に定期的に通うのは米国人であるし、「イーजीライダー」や「ウッドストック」や「ラブアンドピース」の60年代は例外的な時代なので、アメリカ人がイスラムの国々の人々とさほど違わない原理主義的な宗教観を持っていたとしても不思議ではない。加藤喜之の「福音派―終末論に引き裂かれるアメリカ社会」を読み、米国社会に根を張った宗教が人々に与えている根強い影響について目が開かれる思いがした。

アメリカでレーガン大統領が登場したころ、それをイデオロギー的に支えたニューライトが台頭したことがある。鮎川信夫が、米国という国はニューヨークやカリフォルニアの動きばかり見ていたのでは何もわからない、とどこかで書いていたが、アメリカの右派が初めて我々に見える形で登場してきたのはそのころのことだ。その後オバマ大統領の時代に、ティーパーティーというグループの草の根的な運動が台頭して、オバマ大統領が推進したオバマケア（国民皆保険を目指す改革）に反対したり、リーマンショックで金融システム危機が叫ばれる中、銀行への資金注入に対して自己責任論を展開したり、さらにティーパー

ティがそのオルガナイザー的な存在のサラ・ペイリンを共和党の副大統領候補に押し上げたなどのニュースに触れ、その当時はアメリカには変な人達がいるものだと思う程度の関心しか持たなかった。ティーパーティーという草の根運動はラジカルな宗教右派で、個人の自由を脅かす政治的な妥協というものを一切拒んだ。このあたりに社会の分断を加速するムーブメントがあり、のちのトランプ大統領の出現につながる下地を準備した。

表層的にはそう見える。しかしその背景にアメリカの特殊な宗教事情があり、それが脈々と受け継がれていて、歴代大統領の考え方や大統領選挙にも絶大な力をふるってきた。さらに言えばアメリカの宗教右派は「福音」を伝えること（すなわち平たく言えばオルグ）を重視しており、社会運動により自己の主張を実現するという指向を持っている。加藤喜之の著書の中で印象的だったのは、福音派に流れる終末論、特にデイスペンテーション主義（終末を具体的な歴史的出来事として予測する終末論）が重要な思想的背景にあるとの指摘である。世界はすでに終末に至るプロセスの過程にあるということで、イスラエルのパレスチナ攻撃も、ロシアによるウクライナ戦争も理解される。最後に西側勢力と中国との間で最終戦争（ハルマゲドンというそうだ）がたたかわれ、すべてが滅亡したあとでイエスが再臨し人類（福音派ということだろう）が救われるというのが終末論といわれているもので、どう考えても宗教の退廃とは思えないが、アメリカの宗教右派は結束を固くして、陰謀論

を振りまくトランプに扇動されて議事堂襲撃に至るのである。

アメリカ社会の中では新しい形での南北戦争が戦われているかもしれない。教会がコミュニティの中心になっている地方都市や南部の中下位中産階級による、大都市を中心とした高学歴の上位中産階級への挑戦であり、中絶反対、同性婚反対、教育での宗教的価値の擁護、伝統的家族観の重視などのスローガンが、反リベラル・反エリート・反グローバルイズム・人種差別的な潮流を生みだしている。

（坤）

ふたりのシベリア

石原吉郎と香月泰男（一）

遠藤雅樹

さようなら 友よ さようなら

わが友、君はわが胸にある

別離のさだめ——それがあからには
行き遭う日とてまたあろうではないか

エセーニン（内村剛介訳）

シベリアは、幼少のころからロシアの民話や童話、「スベードの女王」「青銅の騎士」「外套」「隊長ブルーバ」「孤児ネルリ」などロシアの文学に親しんできた人間にとって昔から親しい光景であった。デカブリストたちのシベリア（プーシキンの詩）、「死の家の記録」のシベリア、チェーホフのシベリア。ソ連のプロパガンダ映画であるとして評判の悪い「シベリア物語」（一九四八

年）にしても、冬景色や泥濘の道を走るトラック、流れる川、行きかう船、民謡を歌う男たちの表情にシベリアがあった。トロッキーのシベリア逃避行や、ソルジェニーツィン「収容所群島」に触れるのはもつと後年になってからのことで、シベリア鉄道經由でヨーロッパにでかける人のある時代もあったのである。

近代日本の歴史もロシアとは浅からぬ関係にあった。日清戦争以降、ロシアの満州占領と朝鮮半島への影響力の浸透は、日本の安全保障にとって脅威であったし、一方満州と朝鮮半島に対する領土的な野心は帝国主義的な領土拡張を進める西洋列強への対抗という意味もあり、富国強兵・殖産興業を標榜した明治政府にとって、鉄鉱石や石炭などの資源確保と経済的な市場確保という海外膨張戦略は列強に伍していける近代国家建設のためにも避けて通ることができない道であった。司馬遼太郎はどこかで、「日本（日本人）が偉大であったのは日露戦争までだ」といつていたが、政治家や軍人は置くとして、「うた日記」の隅外、二葉亭四迷、ロシア領内や朝鮮・満州で諜報活動に従事した石光真清には個人を超えた国士的な風貌がある。

満州事変以降の昭和の歴史は、偉大であった明治の先達とは違い、満州国建国による国際社会からの孤立と泥沼化する日中戦争に対する見通しの甘さと戦略的な無策のなかで、仏印進駐による対外膨張戦略を展開していくが、軍部の精神主義と資源

確保の必要性に迫られた独占資本を両輪とする大日本帝国は、ここでも見通しの甘さと持続可能性を無視した空気支配が、いつまでも決断できない典型的な状況を招来していくのである。

太平洋戦争の末期のことである。広島長崎に原爆が投下されボツダム宣言を受諾するかどうかの御前会議が開かれていたころ、ソ連が対日参戦を布告し、満州ではドイツ戦線から極東に兵力を転用したソ連の機甲部隊が陸統として大興安嶺を超え、満州平原を南下してきた。「彼を招いた者はいなかった。しかし招かれた者のように確実に 彼はやってきた」(石原吉郎「Erm Kommt」)のである。関東軍の組織的な抵抗はなかったようだ。抵抗するにしても武器も装備も不足していた。関東軍の兵力は当時七十万人といわれたが、戦争末期に満州に召集されたのは丸腰の集団だった。「竹筒を首から紐でぶら下げた自分たちが、牡丹江に着いたとき、現地の古参兵たちがもの珍しそうに眺めていた。そのうちの一人は、もう内地には、そんなに物資がないのか、と言っていた。実際にその通りだったろう。軍服を着ただけの、丸腰の集団だった」(小熊英二『生きて帰ってきた男』)。

戦闘は一週間程度で決着した。日本軍の組織的な抵抗はソ満国境の防衛線だけで、関東軍は崩壊し、八月十五日に司令部は停戦命令を出した。その後の混乱と満州からの民間人引き上げの悲劇はよく知られている。また約六十万人の日本軍将兵・軍

属などがソ連地域に連行され、各地の収容所(ラーゲリ)で数年間、長いひとは十一年間の強制労働を強いられた。石原吉郎も香月泰男もそのうちのひとりである。香月泰男は一九四七年に石原吉郎は一九五三年に帰国し、ソ連抑留で最後まで残った人の帰国は一九五六年で、内村剛介は最後の引き上げ船で帰国している。ちなみに内村剛介は反ソ連・スパイ行為で起訴され二十五年の禁錮刑、石原吉郎は反ソ連行為で二十五年の懲役刑を宣告された。ふたりともロシア語の知識を生かして関東軍参謀本部に勤務していた。石原吉郎は八年間の、内村剛介に至っては十一年間に及ぶ抑留生活であった。

このエッセイは詩人の石原吉郎と画家の香月泰男のふたりを主題にしている。ともに帰国後、シベリアでの体験をもとに香月泰男は「シベリア・シリーズ」としてまとめられる絵画を通して、石原吉郎は『サンチヨ・パンサの帰郷』や『日常への強制』として集成された詩とエッセイで、シベリア体験を反芻することになる。香月泰男は一九一一年生まれ、一九四二年の召集からシベリア抑留を経て一九四七年に帰国するまでの四年半を満州での軍隊生活とシベリアの収容所でくらしした。その間の消息は「海拉爾(ハイル)通信」に収められた書簡に見ることが出来る。石原吉郎は一九一五年生まれで一九三九年に召集を受け、ロシア語の教育を受けると、一九四一年から関東軍司令部に勤務、一九五三年に帰国するまでの八年間をシベリアの収容

所で強制労働に従事した。

ふたりの作品には、シベリアでの体験が色濃く刻印されている。香月泰男は画家として、画家の眼を通してシベリアを体験した。その経験の意味を繰り返し繰り返し画布に塗りこめた。一方の石原吉郎はといえばシベリアから帰国した後、日本の戦後社会と民衆から受けた裏切りと迫害を通してシベリアでの体験をあらためて見つめなおすことでシベリアの意味を再発見したのである。

石原吉郎は一九五四年、「文章倶楽部」（のちの「現代詩手帖」）の投稿欄に「夜の招待」を投稿し、特選作として掲載される。選者は谷川俊太郎と鮎川信夫。戦後詩史の中でも伝説となったこのエピソードは、谷川俊太郎が「文章倶楽部」のころ（「石原吉郎全詩集」手帖）のなかで回想しているが、谷川は「夜の招待」の選評「この詩は詩以外のなものでもない。全く散文でパラフレーズ出来ぬ確固とした詩そのもの」を引用したうえで、「この〈石原吉郎〉全詩集で初めて読むことのできたシベリア詩篇と、この時期の作品との間の断絶に、今の私は驚いている。その間に過渡的な作品があるかどうかは分からないが、この激しい転換をもたらしたものが、石原さんの帰国後の経験と、そのなかから生まれたひとつの意志であるということとは想像で

きる」として、「私は八年の抑留ののち、一切の問題を保留したまま帰国、これにひきつづく三年ほどの期間が、現在の私をほとんど決定しように思える」という石原吉郎のことばを引用している。シベリア詩篇とあるのは、例えば「われやわらかき／手のひらもて／風に裸火をふせが／またたける／いのちを掩はん」（「裸火」一九五二年ハバロフスク）のような石原吉郎のシベリア抑留中の詩を指している。

「夜の招待」は今読んでも、石原吉郎の詩の特徴がよく出ており、代表作のひとつといってもいいだろう。谷川の言うとおり、全く散文でパラフレーズ出来ない詩そのもので、石原の詩を特徴づける韜晦、直喩、リズム感などすべての要素を包含している。

夜の招待

窓のそとで　ぴすとなるが鳴って

かあてんへいっぺんに

火がつけられて

まちかまえた時間が　やってくる

夜だ　連隊のように

せろふあんでふち取ってー

ふらんすは

すべいんと和ぼくせよ

獅子はおのおの

尻尾をなめよ

私は　にわかに寛大になり

もはやだれでもなくなつた人と

手を取りあつて

おうようなおとなの時間を

その手のあいだに　かこみとる

ああ　動物園には

ちゃんと象がいるだろうよ

そのそばには

また象がいるだろうよ

来るよりほかに仕方のない時間がやってくるということの

なんというみごとさ

切られた食卓の花にも

受粉のいとなみをゆるすがいい

もはやどれだけの時が

よみがえらずに

のこつていようと

夜はまきかえされ

椅子がゆすぶられ

かあどの旗がきひきおろされ

手のなかでくれよんが溶けて

朝が　約束をしにやってくる

早い時期から石原吉郎に注目した詩人の清水昶は、石原吉郎についていくつかの文章を書いている。詩集「少年」の作者は石原の詩をどう読んだのか、そのあたりから話を始めようと思う。清水昶の石原論は「詩の根拠」（冬樹社）と「石原吉郎」（国文社）のふたつの評論集で読むことができる。「詩の根拠」は学生時代、傍線を引き引き読んだ形跡のある本でいまだに本棚にある。その当時どんな読み方をしていたのか、自己検証を含めて改めて読み直してみよう。

「一九六二年、喪失の青春をつよく意識したとき、わたしの詩は求道者の相貌にてはじまる。単純な世直しの発想をかまえて国家と向きあったとき政治力学的な場に於いてみずから意味づけ、その言葉を片手にたたかうにはあまりに貧しい言葉の群落に膝を屈し、以来、無意味さにふるえる自身の沈黙の底から意味のある世界に向かって祈るようになりたいはじめねばならなかった。かつて一度でも本当のことを口にしたことがあっただろうかという言葉の喪失感から襲う自責の念はきわめて個人的体験に根ざす詩へとわたしを追いつめ、たしかに実存するものへの愛撫にもいた欲求となつて自己の世界の復元を試みた。一点にたちつくすことを良しとせぬ青春のラディカリズムは本当の言葉、みずからの実存を衝く言葉によつて卑小に墮した私生活を超え得るあくなき抽象の世界を求道したともいえる。実存と触れあう言葉を抽象の世界に

までひきあげること、それは底なしの青春の中で一人私と言葉とのいつ果てるとも知れぬたたかいを意味していた。」(清水昶：「求道としての詩」)

この文章は、「生きる」とは／朽ち果てることだが／それだけではない／草の茎を嚼んで立っていること／きついがみをのみつくすこと／あすもあさつても／憑れた行いの昼と夜を／己れの熱に耐えてたたかうことなのだ」とうたった丹野文夫の詩について書いたエッセイにてくる。清水昶が石原吉郎の詩に出合ったのはそのような精神状況のなかであった。石原吉郎の詩は、そんな清水の眼にどのような像を結んだのだろうか。清水は、詩集『サンチョ・パンサの帰郷』の冒頭の詩篇「位置」を引用したあと、「彼は過去と現在を同時に生きている。ラーゲリでの動かぬ体験を基底に、そこからさらに経た歲月の中で言葉は淨化され、メタフィジカルに彼自身の現在を物語っている。(中略)現実の動きを拒絶し、他人には決して見えないラーゲリの体験に情念を贅いで、現実的であろうとしているからにはかならない。」と書いている。

「石原吉郎は何故、記憶の中に一切の倫理を置いて戦後の日本を生きようと決意したのか。それはラーゲリ体験者たちをさらに打ちのめす残酷な日本の現実に遭遇せざるをえなかったからだ。(中略)ラーゲリで戦争犯罪人として、日本人の戦

争責任を一心に背負って堪えた八年余の歲月は免罪符にはならなかった。みずからの青春を代償として日本人の戦争責任を引き受けたのに、彼は戦争に加担した日本人に、民衆に徹底して裏切られる。(中略)敗戦後の日本、石原吉郎の祖国はにがい幻影の祖国であった。民衆のひとりである石原吉郎はその民衆からも裏切られていく。彼は戦後の日本の歴史を意識的に死ぬことによって、あらゆる戦後の事象に疑念の眼をむけはじめた。(中略)彼を裏切った戦後の世界は敵として彼の眼に映り、そのことは同時に、民衆にひとりにすぎない自分自身に内面に対する果てることのない問いかけを意味していた。いっさいの歴史の責任も純粹に個人にかかわるものであり、国家も血族としての民衆も信じるに足りぬ。信ずるに値するものは人間としてうずくまるみずからの生であり、その生は、いまラーゲリの記憶の中で営々として生きつづけている」(清水昶「サンチョ・パンサの帰郷」)

清水昶が「サンチョ・パンサの帰郷」をはじめとするいくつかの石原吉郎論で明らかにしたのは、ラーゲリ体験と八年間の抑留を経て日本に帰ってきたあと、石原は日本の社会(民衆)に徹底して裏切られ、それが石原に与えたところの傷、それが石原にシベリアでの体験を反芻させ、シベリアの生活のなかにもあった「自由」を再び見出すことにつながり、「国家も民衆も信じるに足りぬ。信ずるに値するものは人間としてうずくま

るみずからの生である」として、石原は戦後の日本の歴史を意識的に死ぬことにより、あらゆる戦後の事象に疑念の眼を向けはじめ、人間の個的な生にのみかわりを持つとうとする「単独者」として生きることを選択した、ということだ。

戦後社会を生きるなかで、時代のがわから常に追いつめられてきた石原は、挑発でもなく、抗議でもなく、ありのままの事実の承認である、として自己の位置を明確にしていた。清水は「時代の風景を遮断しつくそうとする意志において、ひとつの存在の証しである「祈り」を発見し、「祈り」の内であなたは完全な「自由」を獲得したかに見える」（清水「真夜中の大地」）と書いているが、石原の倫理的な強さは、戦後社会からの「断絶」を契機にして「単独者」として生きることを選択した。石原吉郎は日本社会との断絶を「きっぱりと」承認する一方で、シベリア体験の中に再発見した人間と自由を「単独者」として生きるという「位置」を明確に示し始める。

石原吉郎は「三つのあとがき」という短い文章のなかで、「私にとって人間と自由とは、ただシベリアにしか存在しない（もつと正確には、シベリアの強制収容所にしか存在しない）。日あけくれがじかに不条理である場所で、人間は初めて自由に未来を思い描くことができるであろう。条件のなかで人間として立つのではなく、直接に人間としてうずくまる場所。それが私に

とつてのシベリアの意味であり、そのような場所では自分に自身と肩をふれあつた記憶が、（人間であつた）という、私にとつてのかけがえのない出来事の内容である。」と書いている。石原はシベリア抑留のあいだは、おそらくそのような考えには思ひ及ばなかったにちがいない。日本社会への絶望がシベリアを見出させ、人間と自由の意味を「祈り」に見出したのであろう。石原の「祈り」は日本の社会（民衆）に届くことはなかったが、『サンチヨ・パンサの帰郷』から『水準原点』を転機にして『北条』『足利』と進んでいく詩作のありようを暗示している。石原は「三つのあとがき」を次のように締めくくっている。「人間の体験のなかには、よしんばそれが共同の体験であっても、絶対に共有できない部分があり、その部分を確認することだけが、かろうじて〈私が生きた〉という実感につながる。そしてその実感逆を私自身に確認させること。（私の）詩に私ができることは、それだけである。（詩に何ができるか）を一般に問う場合は、私には欠けており、欠けたままである。」

時代はその時々でいろいろな顔を見せる。我々はその時、当事者かもしれない、あるいは傍観者かもしれない。時代が強いてくる課題に対して、当事者の場合もあるだろう、傍観者である場合もあるだろう。時代のなかで生きるとき、時代が強いてくる課題に対して当事者は当事者として振舞い、当事者としての責務において責任を取ることになる。たとえばそれが間違つた

判断であつたにしても、時代の流れは押しとどめることができないし、時代が要求する犠牲なのかもしれない。しかしその中で当事者が負った傷は、傍観者にとつても傷であることがある。

中島敦「古譚」論 その一

「狐憑」と「木乃伊」をめぐる

角 谷 有 一

はじめに

前稿では、中島敦の初期作品とされている「虎狩」と、彼の生前最後に発表した「名人伝」を取り上げて、それぞれの作品制作の時代背景とその中での中島敦の文学的関心の表れを作品世界に探ることを試みた。

今回は、中島敦の代表作として最も人口に膾炙している「山月記」を含み、総題として「古譚」と名付けられた四編を対象に、各作品を個別に読み解くとともに、これらの作品が一括して、「古譚」という総題をつけられた意味をも考察していく。

昭和一六年六月に南洋庁の国語編修書記としてパラオ諸島に赴任する直前に、中島敦は、「狐憑」「木乃伊」「山月記」「文字禍」という四作品を先輩作家の深田久弥に預けていた。中島不在の中、深田は、四作品の中から「山月記」と「文字禍」の二編を雑誌「文學界」に推薦し、昭和一七年二月号に二編が掲載された。中島は、帰国後の昭和一七年七月に、雑誌に掲載され

なかった「狐憑」と「木乃伊」の二編を加え、それに「古譚」という総題をつけて彼の第一作品集『光と風と夢』に収録した。この経緯からも、中島自身は四編を一体のものとして構想していたのだと捉えることができる。

「古譚」の四作品に共通しているのは、言葉や文字の不思議な力をめぐって展開する物語であり、それに捲き込まれ、翻弄される人間たちの姿が描かれているという点である。「狐憑」では、弟が殺害されたことを契機にして、何かに憑かれたように謔言を言い始め、そのうちに、自身にもわからないままに口について物語の言葉を語り出すシャクの姿が描かれる。「木乃伊」では、自身の知らぬ間にエジプト語を理解できるようになっていたペルシャ軍の武将のパリスカスが、攻め込んだエジプトの古い墓室の奥で見つけた木乃伊が、前世の彼自身であると思ひ込み狂気に陥る姿が描かれている。また、「山月記」では、詩への執着を抱えたまま、自身でも気がつかないうちに虎に変身してしまった経緯を旧友に語る李徴が描かれる。最後の「文字禍」では、文字の霊を研究することを命じられたナブ・アヘ・エリバ博士が文字の霊について研究していくうちに文字の霊に取り込まれて死に至る姿が描かれる。いずれの主人公たちも、自らの意志では制御できない「言葉」、あるいは、「文字」の不思議な力に取り込まれて悲劇に捲き込まれるのである。そして、それぞれの作品の主人公たちは、何かに憑かれるようにして周りの人々とは違う世界を生きることになり、孤独に陥る姿が描き出され

ているのである。

本稿では、「古譚」の最初に置かれた「狐憑」と、次の「木乃伊」を取り上げて、それぞれの作品世界を探っていくことにする。

「狐憑」を読む

一 「狐憑」の構成について
作品は、次の言葉から始まる。

ネウリ部落のシャクに憑きものがしたといふ評判である。
色々なものが此の男にのり移るのださうだ。鷹だの狼だの獺だの霊が哀れなシャクにのり移つて、不思議な言葉を吐かせるといふことである。(波線は角谷による)

ここで、「語り手」は、シャクという男に「憑きもの」がして「不思議な言葉を吐かせる」という出来事を、人々の噂を記すように語り始める。ここからわかるのは、この物語が「語り手」自身が直接見聞きしたのではなく、伝え聞いた話を再現するようにして語るといふスタイルで物語が進んでいくことである。「語り手」は、シャクに本当に「憑きもの」がしたのか、シャ

クが自分で話を作って語っているのかという点についてはっきりと断定はせず、あいまいなままに物語を進めていくのである。そして、「後に希臘人がスキュティア人と呼んだ未開の人種の中でも、この種族は特に一風変つてゐる」と、この物語の舞台となる時代や場所を提示し、さらに、登場する主人公のシヤクが属する部落の人々の生活を紹介した後、物語は、「シヤクが変になり始めたのは、去年の春、弟のデックが死んで以來のことである」と、物語の中で現在の時点が示される。物語の時間は、「去年の春」から、最後にシヤクが処分され、その身体が村人たちに食われてしまう結末の現在の時点に向けてまっすぐに流れ始め、「語り手」はその流れに沿ってシヤクの物語を語り進めていくのである。

ところで、この作品に描かれるネウリ部落の風習は、ヘロドトスの『歴史』のいくつかの記述をもとに描かれている。新井通郎によれば、ヘロドトスの『歴史』の記述は、単に「狐憑」の「借景として用いたものではなく、シヤクの物語への発想とをもたらした要因となった」重要な意味を持つということだが、『歴史』の中では、牝馬に乳を滴らせる方法も、戦死者の右手や頭部が奪われる話も、身近な死者が料理されて食事に供せられる話も、それぞれ文脈を異にする違う部族のエピソードとして描かれている。このような点から見ると、中島敦は、これらのエピソードを、自分の作り出す小説世界の舞台となる無文字社会にリアリティを持たせるために、ヘロドトスの記述を借りた

のだと考えられる。

「語り手」は、「去年の春」のシヤクの変化から語り始める。「語り手」の視点は、シヤクの変化を見つめるネウリ部落の人々、特に、彼の話に惹かれて聞き入る若者に置かれることが多いが、時に、シヤク本人の視点へ、さらには、部落の長老の視点へと語る視点を移しながら、シヤクの物語を語り進めていくのである。

次節以降で、シヤクの変化を「語り手」がどのように描いているのか、また、シヤクの話が夢中になって聞いていた村の若者やその様子を苦々しく思う長老たちとシヤクとの関係はどのように描かれているかを見ていくことにする。

二 シヤクの変化と村人たちとの関わりについて

シヤクが変になり始めたのは、去年の春、弟のデックが死んで以來のことである。

「語り手」は、シヤクの変化を弟の死との関係から語り始める。弟のデックは北方から攻めてきたウグリ族の一隊と戦い、殺されて頭と右手を持ち去られたのだが、その弟の屍体を前にしたシヤクの様子を、「どうも、弟の死を悼んでゐるのとは何処か違ふやうに見えた」と、村の人々の見たシヤクの印象を伝聞として語りながら、その後、シヤクが妙な讒言を言うようになったのを、「秘かにデックの魂が兄の中に忍び入つたのだと」捉える

のが自然なことだと人々にも読者にも思わせるように語っている。しばらくすると、シヤクはデックとは関係のない動物や人間の言葉を話し出すようになる。それに対する人々の反応とシヤクの思いは次のように語られている。

人々は珍しがつてシヤクの謔言を聞きに来た。をかしいのは、シヤクの方でも（或ひは、シヤクに宿る霊共の方でも）多くの聞き手を期待するやうになつたことである。

ここには、シヤクの語る話が聞き手との関係の中で変化していく様子が描かれている。そして、人々が「シヤクの言葉」は憑きものによるのではなく、「シヤクが考へてしゃべつてゐるのではないか」という疑念を抱くようになる経緯が、人々の視点から語られるのだが、その後で「語り手」は、シヤクの視点に立つて次のように語る。

初めは確かに、弟の死を悲しみ、其の首や手の行方を憤ろしく思ひ画いてゐる中に、つい、妙なことを口走つて了つたのだ。之は彼の作為でないと言へる。しかし、之が元來空想的な傾向を有つシヤクに、自己の想像を以て自分以外のものに乗移ることの面白さを教へた。

ここにあるのはもう「憑きもの」による謔言とはいえないも

のだ。「語り手」は、シヤクに何か憑きものがしてそれがシヤクに語らせているのか、シヤク自身が考へて語を作つて語っているのかを曖昧にしながら語つていくのではあるが、それと同時に、シヤクの謔言が、これまで部落の中で見られた「憑きもの」した人間」とは明らかに違つたものであることをも読者に提示していくのである。

シヤクは、ある強いショック、自らの命をもぎ取られるような痛み、ここでは、他に身内のいないシヤクにとつてただ一人のかけがえのない弟が、頭と右腕を切り落とされ、「辱めを受けつてうち捨てられていた」ことに強い衝撃を受けるのである。シヤクはその事実を受け止めきれずに悲しみと憤りの中で深い喪失感に陥つたのだと考えられる。その喪失感を埋めるようにして、シヤク自身も思いつかないような言葉が次々に口をついて出て来たのである。このようにして湧き出て来た謔言がシヤクという人間の心を大きく変えてしまうのだ。これを、シヤクの潜在的な才能が開花したのだと捉えることもできるかもしれないが、弟の死という深い喪失感の中で、言葉の不思議な力に取り憑かれてしまったと見ることもできるのではないか。「語り手」は、ここでも、シヤクが言葉を獲得したというよりも、人を惹きつける魔力を持った「言葉の霊」がシヤクの口を借りて語つていくのだという「不思議」を否定できないように語つてい

る。そういう言葉の噴出に身を任せているうちに、シヤクの中に

「想像を持って自分以外のものに乗り移る面白さ」が生まれたのではない。そして、次第が増えてくる聴衆が、自分の語る物語に反応してさまざまな表情を浮かべるのを見て、さらに、その面白さが加速して、彼の空想物語の構成も巧みになっていったのだと解釈できる。

三 シャクの話と村の長老たちとの関係について

このようにして、シャクも聴き手とともに次第に変化していく様子が描かれていく。「自己の想像を以て自分以外のものに乗り移ることの面白さ」を知ったシャクとそのシャクの話の面白さに惹かれて新しい話を求める聴衆たちとの相互作用によって次々と「素晴らしき話」が語られ、物語の進化、高度化がなされていく経緯が語られるのだが、ここで、この小説世界に大きな変化をもたらす村の長老たちが登場する。

彼らの思いは次のように語られている。

若い者達がシャクの話に聞き惚れて仕事を怠るのを見て、部落の長老達が苦い顔をした。彼等の一人が言つた。シャクのやうな男が出たのは不吉の兆である。もし憑きものだとすれば、斯んな奇妙な憑きものは前代未聞だし、もし憑きものでないとすれば、斯んな途方もない出鱈目を次から次へと思ひつく氣違ひは未だ曾て見たことがない。いづれにしても、こんな奴が飛出したことは、何か自然に悖る不吉なことだと。

そして、長老たちは「秘かにシャクの排斥を企」むのだが、ここでの長老たちのシャクに対する嫌悪は、単に村の若い者たちがシャクの話に聞き惚れて仕事を怠るようになったということに対してだけではない。シャクの行っていることが、村人たちが長年それに従って生きてきた共同体の掟の外に出て、掟を破る行為につながるのではないかという長老たちの不安、違和感に基づくものだったのではないだろうか。そういう違和感が、村を統治する長老たちに危機感をもたらしたのだと考えられる。文字を持たないネウリ部落の人々は、遙か昔の祖先以来、湖上に家を建て、湖の魚や獣を捕り、麻布と獣皮を身にまとい、馬肉、羊肉、木の実を食べて馬乳や馬乳酒を飲むという変わらぬ生活をしてきたはずだった。そんな中に、突然、若い人たちを惹きつける娯楽として面白い話をするシャクが現れたのである。これが村の生活を変え、共同体の存続さえ危ぶむような事態を招くのではないかと長老たちは考えたのだ。

そこで、長老たちは、シャクを排斥しようと企てるようになる。彼らは奸智に長けたやり方で、シャクが部落民としての義務を怠っていることを村人たちに納得させ、シャクと村人たちの繋がり亀裂を入れた上で、憑きものが落ちたように話をしなくなってしまったシャクが部落にとつて有害無用な者だと認めさせるのだ。そして、長老たちに買収された占卜者の予言を利用して、シャクの処分を決めてしまうのである。シャクは殺されて、羊や馬の肉とともに大鍋で煮られて長老たちや村の若者たちに

食われてしまうのである。

「去年の春」に、弟の死の深い喪失感の中で生まれ、高度化してきたシャクの物語は、村人たちに食われて、骨は湖に投げ込まれて跡形もなく消えてしまったシャクの身体とともに村の人々の心の中からも消失してしまっているのである。

四 「語り手」をどう捉えるか

ここまで見てきた「狐憑」の叙述をもとに、改めてこの作品の「語り手」の役割について確認しておくことにする。

この小説の「語り手」は、冒頭でも述べたように、自身が直接見聞きした話を語っているのではない。まるで、シャクの聴衆だった村人から伝え聞いた話を再現するようにして、シャクが讒言を吐き出してからその死に至るまでを再構成して語っているのだ。

さらに、この「語り手」は、シャクと同じ時代を生きてはいない。「語り手」が小説の中に登場して次のような言葉を記しているところからも、そのことは明らかである。

但し、斯うして次から次へと故知らず生み出されて来る言葉共を後々迄も伝へるべき文字といふ道具があつてもいい筈だといふことに、彼は未だ思ひ至らない。今、自分の演じてゐる役割が、後世どんな名前と呼ばれるかといふことも、勿論知る筈がない。

ここで、「語り手」は、この時代に文字がないという重要なことを指摘している。シャクの語る物語と聴衆との関係は、その瞬間／＼に生まれて消えていく、文字を介さない言葉によるものなのだ。このことから、また、この「語り手」が、文字を持つ時代を生き、シャクの物語を文字によって書き記しているということもわかるのである。この「語り手」は、シャクの生きた時代とは遙かに時間を隔てた現代（それを昭和十年代という作者が生きた時代だと想定することも可能であろう）から、シャクが処刑されて食われてしまうという物語内の「現在」の時点に身を置いて、その前年の春から時系列に沿ってシャクの死までを語っていると捉えられるのである。この小説の「語り手」は、文字の持たない古代社会を、文字を持つ現代社会の視点から批評する眼をもつて語っていることがわかる。

「語り手」は、シャクの物語の最後を次のような言葉で締めくくっている。

ホメロスと呼ばれた盲人のマエオニデエスが、あの美しい歌どもを唱ひ出すよりずっと以前に、斯うして一人の詩人が喰はれて了つたことを、誰も知らない。

ここからは二つのことが読み取れる。

まずは、冒頭から、シャクが何かに憑かれているのか、それとも、自分で考えて話を創作しているのかを、「語り手」は曖昧

にしたまま語ってきたが、憑かれているにしろ創作しているにしろ、「語り手」はシャクを「一人の詩人」として見ているということである。もちろん、「詩人」という概念自体はシャクの生きた時代よりも後に生まれた概念であり、この「語り手」が「詩人」と呼んでいるのは、適及的な命名には違いないのだが、シャクを言葉による創作者と捉えていることは間違いないのである。

もう一つは、「誰も知らない」という言葉の意味するものである。ここで明らかなのは、文字のない世界で語られた話もそれを語ったシャクのこと、シャクが食われて消え去ってしまったえば後には何も残るものはないということである。だとすれば、現代を生きる「語り手」がシャクのことを知ることもないはずなのだ。そういう「誰も知らない」シャクのことを「詩人」と名付け、そのシャクと彼が語った物語を文字を用いて書き記すことによって、「語り手」は、シャクを含めた無文字社会を生き、後世の誰にも知られることなく死んでいった「詩人」を蘇らせているといえよう。

言葉は、人と人をつなぎ、文字はその繋がりを持続させる力を持つことを「語り手」はここで体現しているのである。

「語り手」は、まず、無文字社会の「詩人」たちをよみがえらせた上で、「言葉」によって作られる物語がいかに人を惹きつけていくかということ、シャクと聴衆との関係を語りながら読者に語っていく。それは、文字を持たないからこそ、その場で語られ、その瞬間に享受されるという繋がりであり、文字を介

した現代の詩人や小説家と読者との関係よりも直接的で単純なのである。聴衆の反応は語る物語に直接的な影響を与え、その場で享受されて消えていくのである。だからこそ、その関係に少しでも齟齬が生じたとき、生み出される物語そのものも大きな影響を被るのだ。そのような言葉の持つ不思議な力を怖れたからこそ、長老たちは奸計を用いて、語り手と聴衆の関係に亀裂を入れた。そして、シャクを孤立化させて処分することで、部落という共同体に受け継がれ続けてきた秩序が、シャクの言葉の力によって壊されることを防ごうとしたのである。

五 最後に『古譚』全体に関わる問題に向けて

「狐憑」を論じる評者の中には、もしシャクが文字のある時代を生きていれば処分されることもなかったのではないかと捉える見方もあるが、むしろ、文字を得ることによってシャクの言葉はさらに危険なものになった可能性が高い。

中島敦によって書かれた同じ「古譚」の一篇、「文字禍」では、「文字を持つことの危険」が次のように語られている。

文字の精共が、一度或る事柄を捉へて、之を己の姿で現すとなると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのぢや。反対に、文字の精の力ある手に触れなかつたものは、如何なるものも、その存在を失はねばならぬ。

ここで指摘されているのは、言葉の力というのは文字を得ること、より強力なものになるということである。さらに、文字によって書き残されたものは永遠の力を持ち、文字に残らないものは存在しなかったことになるというのである。ところで、作品の中では直接言及されているわけではないが、ここからは、作者自身が生きていた昭和十年代の統治者たちによる言論統制の力の恐ろしさを想像することもできるのではないか。それは、共同体の秩序維持のために危険な語りを排除しようとした「狐憑」の中の長老たちと相似的に捉えることのできる権力の構造なのである。

もし、シャクが文字を持つ現代の「詩人」であつたとしても、彼が創作する言葉が共同体の掟に抵触するならば、その文字の持つ力を怖れる共同体の統治者たちによつて、シャクが処分されるだけではなく、書き残されたものも処分されてしまうに違いないということも、この「語り手」は暗示していると考えていいであろう。

「狐憑」の物語が描き出しているのは、詩や小説という文学が、共同体の中でどのようにして生まれて力を得、どのようにして死んでいくのかを、文字を持たない社会の物語を設ちえることで端的に表現した寓話だと言えるのである。

これは長老の暴力を相対化するものではないが、シャクの物語に惹きつけられ、シャクを、狐憑きから物語作家へ、さらに、物語を忘れた怠け者へ、そして、最後にその処刑へと導いていっ

たのは、結果的には、最も熱心にシャクの話聞いていた部落の若者たちだとも言えるのではないだろうか。「語り手」は、その若者たちの視点からシャクの視点へ、そして、長老の視点へと視点を移していく。こうして、「語り手」は、シャクの生きる無文字社会を、現代の文字によつて虚構の物語に仕立て直していくのである。その過程で、「憑き物が憑くように」シャクに受け入れられて蘇つた言葉をすくい上げて、寓話を書き進めていったのである。このように捉えるならば、この現代の寓話作家である「語り手」という虚構の存在こそ、象徴的には、文字を手に入れたシャクだと言えるのではないだろうか。

「語り手」は、無文字社会でのシャクの物語を語ることを通じて、言葉の持つ不思議な力と、それが、いかなる形で言葉を操る個人を捉え、また、その死をもたらすのかを寓話として読者に示しているのである。さらに、物語の中では直接言及することとはなかったが、「文字」の持つ力をも読者に暗示しているのである。これは、「古譚」という連作の最後に置かれた「文字禍」へとつながるテーマでもある。

「狐憑」は、無文字社会を舞台として、言葉の持つ霊性が共同体を揺るがす力になり、さらには、その力が文字を持つことで保存され持続されて、言論統制に繋がる可能性があることをも示した寓話として読むことができる作品なのである。

注

1 この点については、佐々木充が「山月記—存在の深淵—」(『近代の文学』10巻 中島敦の文学 桜楓社 一九七三年六月刊)の中で指摘している。

2 新井通郎「中島敦「木乃伊」の構造」(『二松学舎人文論叢』71「二〇〇三年一〇月刊」)

付記1 「狐憑」、「文字禍」の本文については、『中島敦全集』(筑摩書房二〇〇一年刊)によったが、旧字体で書かれているものは原則として新字体に改めた。ルビについては適宜省略した箇所もある。

「木乃伊」を読む

一 「木乃伊」の先行研究と本稿の問題設定について

「木乃伊」は、この論考の「はじめに」でも述べたように、四作品を託された深田久弥が雑誌に『古譚』として「山月記」と「文字禍」を推薦する際に、「狐憑」とともに外された作品である。戦後、「山月記」が国語教科書に採録され、現在に至るまで定番教材として他の『古譚』の作品とは切り離されて単独で論じられることが多かったために、注目されることの少なかった作品でもある。そんな中で、一九七三年に佐々木充が、その『山月記』論の中で、『古譚』とは、上記二編のみではなく、他に、「狐憑」「木乃伊」という短編を併せ、全四篇から成り立つものである。通常、「山月記」は単独で扱われて、この『古譚』の中の一編、ということを忘^{注1}れられている」と論じ、「山月記」以外の『古譚』作品に目を向けることによって、この四作品が共通して、「つねに〈文字・言葉〉をめぐって展開する」という点を指摘した。また、鷺只雄は、佐々木の捉え方を評価しながらも、「木乃伊」の主題は、「存在の不条理性」である。生への不安、生を支配する不可解なものへの恐怖である^{注2}と論じた。この二氏の『古譚』の読みは、その後の「木乃伊」論にも大きな影響を持ち続けて

いる。

その後は、『古譚』四作品の共通性に目を向けて論じられることが多くなってきたが、そんな研究状況の中でも、「木乃伊」は論じられることが比較的少なかった。その理由を、奴田原論は、「研究者諸氏の間に於いて「木乃伊」の評価が低いことも事実である」と、小説としての達成度を問題にした上で、「木乃伊」の描いているのが、「〈文字・言葉〉」という『古譚』に共通するテーマから少しはずれているからだ指摘する。奴田原は、「〈文字・言葉〉」を「〈物語〉或いは〈言葉の魔力〉」とした場合、「その規定からはじかれてしまう」のが「木乃伊」であり、そこに「木乃伊」が『古譚』の他の三作品に比べて論じられることが少ない要因があったと捉えている。

しかし、近年になって、「木乃伊」を昭和十年代の文学状況の中に置き戻して捉え直そうという試みや、作品執筆時の「日本と植民地をめぐる現実をテキストに反映させた」作品として捉えようという試み、さらには、比較文学の視点や身体論、「輪廻転生」という観点から捉えようとする試み、また、言語学や精神分析学を援用した分析など、さまざまな視点から論じられるようになり、「木乃伊」という作品の新たな読みが注目されるようになってきた。

そんな中で、「木乃伊」が、先に論じた「狐憑」と同様に、ヘロドトスの『歴史』の記述をもとに構想されたという点についても、先行研究の中で指摘されている。特に、新井通郎は、「木

乃伊」論の中で、「木乃伊」に於ける『歴史』の受容について詳細に論じている。ただし、ここでは、パリスカスをめぐる「木乃伊」の物語が、その舞台となるベルシャ軍によるエジプト侵攻という『歴史』に記された出来事と深い繋がりがあり、そのことが作品のテーマとも密接に関わっているという点だけを指摘しておきたい。

さて、以上のような先行研究も参考にしながら、本稿では、主人公のパリスカスがエジプト語を理解できるようになることは、物語の中でどのような意味を持っているのか。また、パリスカスがその身体に変調をきたすことで魂に前世の記憶が蘇ってくるという物語の核となる出来事をどのように捉えればいいのかという、二つの問いを中心に考察することによって、「木乃伊」の読みの可能性を探ってみたい。

二 パリスカスという主人公と彼をめぐる物語について

小説の冒頭部で、カンビュセスのエジプト侵攻に従軍した主人公パリスカスについて、「語り手」は、その父祖が「バクトリア辺から来たものらし」と指摘している。バクトリアは、もとは、メディア王国の一部で、ベルシャにとっては異国の地だった。つまり、パリスカスの父祖は、ベルシャ人ではなく、異民族であり、後にベルシャに征服された被征服者でもあったのである。だとすると、パリスカス自身も、被征服者の子孫だといえるのである。この点については、永井博がその「木乃伊」論

の中で詳しく考察している。パリスカスが「何時迄たつても都の風になじまぬ頗る陰鬱な田舎者である」のもそのせいであり、ベルシャの「人々の嘲笑」を買うのも、異民族に対する差別的な感情に根ざしたものではないかと推測できる。このような出自のパリスカスが、征服者であるベルシャ軍の部将としてエジプトに侵入してきたのだ。彼にとってエジプトの民を見ることは、かつての己自身や己の父祖を見ることと重なったのではないか。そこに、「何処か夢想的な所がある彼の資質も加わって、エジプト侵入後の彼の異常な行動につながったのではないかと考えられる。

パリスカスのエジプト侵入後の行動とそこでの彼自身の様子やその思いについて、時系列に沿って見てみよう。

エジプトの地に入った頃のパリスカスは、見慣れぬエジプトの風物を眺めながら、何かを思い出そうとして思い出せない「いらく」を感じている。さらに、それまで一度もこの地に足を踏み入れたこともなく、エジプト人との交際もないにもかかわらず、捕虜として連れてこられたエジプト人の話す言葉が理解できることに気付くのである。

パリスカスとエジプトとの関係が一層深まるのが、ベルシャ軍のメンフィス入城の時である。パリスカスの「沈鬱な興奮はさらに著しくなる。彼が市のはずれに建つ方尖塔^{オベリス}に書かれたエジプト文字を読んで、そこに書かれた内容を説明し始めたとき、エジプト語を聞いてわかるだけでなく、その文字を読むこ

とができることにも、自身、初めて気付いて驚き、彼の「沈鬱な興奮はさらに著しくなる」のである。

いよいよ、カンビュセスがサイスの市に入り、エジプトの先王アメシスの屍を探し出すように命じたとき、パリスカスは、「沈鬱な面持ちで、墓から墓へと歩き廻り、搜索開始から何日目かの「或る午後」に、地下の墓室で、一体の木乃伊と出会うのである。その木乃伊の顔を見たとき、彼は視線をそらすことができなくなる。彼は、自身の身体の内側で「非常な変化が起つたやうな気」がするのだ。その変化を経て、パリスカスの気分はすっかり変わってしまう。その新たな気分を、「語り手」は、まるでパリスカスが自身を感じているように、彼に寄り添う視点から語る。

彼は大変やすらかな気持になった。気がつくとき、埃及^{エジプト}入国以来、気になつて仕方のなかつたこと——朝になつて思出さうとする昨夜の夢のやうに、解りさうであつて、どうしても思出せなかつたことが、今は実に、はつきり判るのである。なんだ。こんな事だつたのか。彼は思はず声に出して言つた。「俺は、もと、此の木乃伊だつたんだよ。たしかに。」

エジプト侵入以来ずっと抱えていた気がかりがここで一挙に解消されたように、パリスカスと思うのだ。

エジプトの風物を最初に見たときの不思議な感覚は不安であ

り、次にエジプト語を話す捕虜の言葉がわかるという不思議があり、エジプト語で書かれた方尖塔の文字が読めることに気づき「変な気持」になるのだが、このような予兆のすべてが、ここでの木乃伊との出会いへとパリスカスを導き、彼の心に解決を与えることになるのである。

三 パリスカスと木乃伊との関係について

この時、パリスカスの気持が大きく変化して、前世の自分がこの木乃伊だったと確信するのだが、その直前にパリスカスの身体に起こる変化は、次のように語られている。

彼の身体を作上げてゐる、あらゆる元素どもが、彼の皮膚の下で、物凄く（丁度、後世の化学者が、試験管の中で試みる実験のやうに）泡立ち、煮えかへり、其の沸騰が暫くして静まつた後は、すっかり以前の性質と変つて了つたやうに思はれた。

ここに描き出されているのは、身体現象としての変化であり、その変化を「語り手」は、身体の化学的变化がその主体である内面に及び、「すっかり以前の性質を変えて了つたやうに思はれた」と語る。つまり、ここでは、それまでは一体であった「身体」と「魂^{ソウル}」との間に亀裂が入ったことを象徴的に描いているのではないだろうか。そして、「語り手」は、それをパリスカス

と木乃伊との交感として描いているのである。彼の身体を通じて、その内にある魂にエジプトの木乃伊の記憶が入り込んできて、前世の自分がこの木乃伊だったんだと確信する姿を、「語り手」は、読者に向けて語る。しかし、ここでは、身体を支配しているのが、まだ、パリスカスの魂であることが示唆されている。そして、この時のパリスカスに呼応するように、「木乃伊が、心持、唇の隅をゆがめたやうに」思うのもパリスカスなのである。ここで、パリスカスの心に、この木乃伊の「遠い過去の記憶が、一どきに蘇つて」くるのだ。

パリスカスの魂に入り込んだ記憶は、「陽の直射」や「微風のそよぎ」、「泥の匂」、「白衣の人々の姿」、「香油の匂」や「冷やかな石の感触」など、極めて直接的で原初的な身体感覚の世界なのだ。このように感じているのはパリスカスの魂であるはずだが、ここで「語り手」は、「魂が彼の身体を抜け出して、木乃伊に入つて了つたのであらうか」と、パリスカスと木乃伊の魂とが一体となつてしまったように語っている。

彼の変化は、身体が物理的・化学的に激しく揺さぶられることによって、その身体とそれを支える主体としての魂との間に隙間ができ、そこにエジプトの木乃伊の記憶が入り込んだのだと捉えることができるのではないか。

この直後に、木乃伊の記憶に翳がかぶさり、「目の眩むやうな下降感」とともにその記憶が消えて、ペルシャの軍人としてのパリスカスの魂がその身体に戻ってくるのだが、身体を取り戻

したパリスカスの魂は、それまでその中を漂っていた、「語り手」の用いた語彙で言うところ、「前世の記憶の底」を覗き、その闇の中に眠っている過去の記憶を次々に見出して、それを凝視しているうちに足はすくみ、また、木乃伊の顔から目を離すことができなくなってしまうのである。

四 パリスカスにとっての「エジプト語」と、不気味な記憶の連続について

この小説を、そのストーリー展開から捉え直すと、エジプト侵入以来パリスカスを感じていたさまざまな違和感や、エジプト語を理解できる能力を身につけていたことなどは、すべて、古い墓の奥で見つけた木乃伊が、実は前世のパリスカス自身であったことに気付くという展開に説得力を持たせるための伏線だったのだと解釈できるように書かれている。しかし、「語り手」は、パリスカスの前世がこの木乃伊だということを物語内の事実として断定しているわけでない。パリスカスが出会った木乃伊を見て、「俺は、もと、此の木乃伊だったんだよ」と納得する場面でも、それを、パリスカス自身の言葉として直接話法で引用することによって、「語り手」は、パリスカスの「前世」がこの木乃伊だったのか、それとも、パリスカスの思い込みにすぎなかったのかを断定せずに語っていることがわかる。

このような語り方を見ると、「語り手」は、パリスカスの物語を、いわゆる「宗教的な」輪廻転生を主題とする物語として語

ろうとしているのではないことがわかる。本稿では、パリスカスがこの木乃伊に強く引き寄せられていく過程を、エジプト語の習得という言語習得体験を媒介として、この木乃伊の生きていた記憶の中のエジプト世界を受入れていく過程と捉えたい。

「語り手」は、パリスカスがエジプト侵入以来、敗戦国エジプトの風物を「特別不思議さうな眼付で眺め」ていると語る。そこから読み取れるのは、パリスカスにとって初めて目にするエジプトの風物が、同じように征服された自身の父祖の故郷の風物と重なって見えるような、ある既視感を持つて受け止められているということである。そして、そのような思いがエジプトの風物に対する意識下での共感となって、パリスカスを「何か落著かぬ不安げな表情」にさせ、「何かを思出さうとしながら、どうしても思出せない」ものを彼の心に抱えさせているのである。パリスカスにこのような変化が生まれたことと彼がエジプト語を理解できるようになることとの間には、物語の中では説明されない飛躍があるのだが、「語り手」は、その飛躍を埋めることなく、エジプト語を理解できるようになったパリスカスを描き出している。読者は、戸惑いを感じつつも、パリスカスが、それまで以上に、エジプトの地、エジプト人に強い共感を持つようになったことを読み取るのである。そして、その心理的な接近が、パリスカスを、「前世の自分」だと確信することになる木乃伊との出会いへ導くのである。

ところで、ある言語とその言語を生み出した生活や文化とは

密接に関わっているものである。そうであるなら、パリスカスがエジプト語を理解できるようになったことで、彼の中で、幾百年も前からのエジプトでの生活、文化や歴史への理解が一度に深まり、偶然出会った木乃伊を前にして、彼の想像力が強く刺激されて、この木乃伊の魂への自己投入がなされたと思えることもできるのではないだろうか。パリスカスの心の内に、この木乃伊がかつてこの地で生きていた時の生活の記憶が次々と思いつく、その記憶に自己を投影して、それが「前世の自分」の記憶であると信じ込んでしまったのではないか。そのように捉えたと、この小説が描き出そうとしているものが、少し見えてくるように思われる。

ここで、彼に蘇った記憶の世界をあらためて見直してみると、そこに大きな「ねじれ」があることに気付く。それは、彼の魂の記憶となつて現れた世界が、名前を持たない世界であるという点に関する「ねじれ」である。この「記憶の世界」は、「名の無い形と色と動作」だけの「異常な静けさ」の支配する世界なのである。それは、音を伴う「言葉」を持たない世界でもある。ここでいう「ねじれ」とは、エジプト語という言葉を理解できることが入り口となつて入り込んだ木乃伊の「記憶の世界」が、言葉を持たない「言葉以前の身体記憶の世界」だったことである。「名」を持たない、言葉のない世界というのは、言葉によつて積み重ねられる「時間」のない世界であり、歴史化されない世界でもある。この木乃伊は、歴史から切り離されて、時間の彼方

に沈んだ「名」のない存在でもあったのだ。

ところで、言葉としての「名」、「名前」というのは、限られた時間の中にある物や人の「個」を、他と切り離された唯一の「個」として立ち上がらせるもの、つまり、「個の固有性」を表すものなのである。ところが、パリスカスが蘇った記憶の中では、ある時間の中に存在するはずの「固有の個」が存在しないのだ。そこにあるのは、他との代替可能な世界なのである。

このように「名」を持たない記憶の世界の中で、時間の彼方に沈んだ記憶の「奇怪な神秘の顕現」に慄然としているパリスカスの前に、さらなる「奇怪な前世の己の姿」が現れる。「前世の自分」だと信じていた木乃伊が、さらに、己の前々世の自分の身体である木乃伊と出会うのである。このようにして、パリスカスは、「不気味な記憶の連続」の中に投げ込まれて逃げ出すことができず、木乃伊を抱いたまま倒れているところを、翌日になってベルシャの兵士たちに発見されるのである。ところで、息を吹き返したパリスカスがしゃべっている譚言の「言葉も、波斯語ではなくて、みんな埃及語だった」という最後の一節からわかるのは、彼が、それまでは「自分でその言葉を話すことは出来なかつた」エジプト語が声に出して語ることでもできるほどに身についた言語になつていったということであり、それは、彼がエジプトの木乃伊との交感によつて、さらにエジプトという異文化世界に深く入り込んでしまったことでもある。そして、同時に、木乃伊の記憶の世界の中で、時間も言葉としての名前

を持たない世界を漂っていたパリスカスの魂が、たとえ狂気の兆候を見せているとはいえ、少なくとも、固有名と身体を持つ、パリスカスという「個」の中に戻ってきたことをも意味している。それゆえ、ここでは、「自己」と他者、身体と魂、現在と過去といった境界が崩れ、自己の固有性が揺らぐ経験とし描き出されているのだが、それは、完全に消失して他者化されるわけではないのである。

五 最後に

ここまでこの作品を読んできると、パリスカスと木乃伊の出会いからは、「二」で述べた二つの問題に迫る手がかりを読み取ることができるのではないか。

戦勝国ベルシャの部将であるパリスカスが、敗戦国の言葉であるエジプト語を理解できることに気付き、その言葉に導かれるようにして前世の自分であると確信する木乃伊と出会うというのが、パリスカスと木乃伊との出会いの前半の物語である。幾百年も前の木乃伊の身体から目が離せなくなったパリスカスは、憎むべきはずの敵国の木乃伊を前にして、エジプト人やその生活に親近感を持ち、木乃伊の身体を通じて、「他者」であるはずのエジプト人の記憶の中に自己の影を見失ってしまうのである。さらに、この木乃伊の記憶と一体化した記憶の世界の中で、エジプトの生活・文化を「他者」異文化」として捉えるのではなく、そこに、「自己」のあり得たかもしれない可能性をも見失ってしまう

たのである。

ここからは、敵対していたり、支配・被支配の中で決して相容れない関係の中にあっても、異文化に対する共感によって、異文化同士の相互理解に至る可能性が残されていることが読み取れるのである。

もう一つの問題は、パリスカスの魂が「彼の身体を拔出して、木乃伊に入ってしまった」と感じられ、魂に前世の記憶が蘇ってくるという、物語の核となる出来事をどのように捉えればいいのかということであった。

パリスカスは、前世の自身であると信じる木乃伊の記憶の中で、前述のように、「無限に内に畳まれて行く不気味な記憶の連続」に投げ込まれる。この出来事を「輪廻転生」が確定したという事実として読むことはできない。それは、パリスカスの中で、自己と他者との境界が崩れ、自己の固有性が揺らぐ経験として描かれているのである。この経験からは、「個」の固有性はどのようにして保たれているのかが問われている。さらには、身体と魂とはどのような関係があるのかという問題も読者に投げかけられているのである。物語の中でのパリスカス自身も、ベルシャの部将としての身体を持った現実世界の自身と、被征服者である父祖やエジプトの魂との共鳴によって生み出された想像上の記憶の世界の中の自身とに引き裂かれ、その間で揺れ動いている。ここからは、魂がひとつの身体には回収されず、支配者としての身体と被支配の歴史を持つ魂とに乖離してしまい、

パリスカスの魂が木乃伊に入り込む感覚を持つに至ったのだと捉えることができる。

ここで問われているのは、歴史・文化、そして、他者を、共感を持って引き受けたとき、自己はどこまで自己であり得るのかという問いでもある。その上で、その問いをどのように受け止めるのが、一人一人の読者に投げかけられているのである。

注

- 1 佐々木充「山月記―存在の深淵―」（『近代の文学』10巻 中島敦の文学）桜楓社 一九七三年六月刊
 - 2 鷺只雄「古譚―物語の饗宴」（『中島敦論 「狼疾」の方法』有精社一九九〇年五月刊）
 - 3 奴田原論「夢想家のカタストロフィ ―中島敦「木乃伊」論」（『二松学舎大学人文論叢』67）二〇〇一年一〇月刊
 - 4 山下真史「第四章『古譚』論」（『中島敦とその時代』双文社二〇〇九年一二月刊）
 - 5 永井博「中島敦「木乃伊」論 ―同化の論理と抵抗の論理―」（『四日市大学論集』24巻 第2号）二〇一二年刊
 - 6 諸坂成利「Ⅱ 木乃伊」（『中島敦「古譚」講義』彩流社二〇〇九年一二月刊）
- 関根久美子「中島敦「古譚」論 ―束縛する（身体）による脱出の可能性―」（『上越教育大学国語研究』二〇一六年二月刊）

石井要「『木乃伊』に於ける転生の語り―意識の彼方、狂気の手前で―」（『中島敦 意識のゆらぎから複数の世界へ』ひつじ書房二〇二四年五月刊）

7 ボヴァ・エリオ「他性、記憶と忘却 ―「木乃伊」との邂逅―」（『中島敦文学論 植民地と他性』人文書院二〇二二年七月刊）

8 新井通郎「中島敦「木乃伊」の構造」（『二松学舎人文論叢』71）二〇〇三年一〇月刊

9 この点について、ボヴァ・エリオが、「中島敦『古譚』における言語と死 ―「言葉の魂」を視座に―」（『関西近代文学』3号）二〇二四年三月刊）の中で、「狐憑」と「木乃伊」を取り上げて論じている。

10 永井博「中島敦「木乃伊」論 ―同化の論理と抵抗の論理―」（『四日市大学論集』24巻）二〇一二年刊

11 「魂」という語を、本稿では、身体をその主体として支える「内面」という意味で用いている。

付記「木乃伊」本文は『中島敦全集』（筑摩書房二〇〇一年刊）によったが、旧字体で書かれているものは原則として新字体に改めた。ルビについては適宜省略した箇所もある。

狐憑

中島敦

ネウリ部落のシャクに憑きものがしたという評判である。色々なものがこの男にのり移るのだそうだ。鷹だの狼だの鰻だのの霊が哀れなシャクにのり移って、不思議な言葉を吐かせるということである。

後に希臘人がスキュティア人と呼んだ未開の人種の中でも、この種族は特に一風変つてゐる。彼等は湖上に家を建てて住む。野獸の襲撃を避けるためである。数千本の丸太を湖の浅い部分に打込んで、その上に板を渡し、そこに彼等の家々は立つてゐる。床のところどころに作られた落し戸を開け、籠を吊して彼等は湖の魚を捕る。独木舟を操り、水狸や鰻を捕える。麻布の製法を知つていて、獸皮と共にこれを身にまとう。馬肉、羊肉、木苺、菱の実などを喰ひ、馬乳や馬乳酒を嗜む。牝馬の腹に獸骨の管を挿入れ、奴隷にこれを吹かせて乳を垂下らせる古来の奇法が伝えられてゐる。

ネウリ部落のシャクは、こうした湖上民の最も平凡な一人であつた。

シャクが変になり始めたのは、去年の春、弟のデックが死んで以来のことである。その時は、北方から剽悍な遊牧民ウグリ族の一隊が、馬上に偃月刀を振りかざして疾風のごとくにこの部落を襲うて来た。湖上の民は必死になつて禦いだ。初めは湖畔に出て侵略者を迎え撃つた彼等も名だたる北方草原の騎馬兵に当りかねて、湖上の栖処に退いた。湖岸との間の橋桁を撤して、家々の窓を銃眼に、投石器や弓矢で応戦した。独木舟を操るに巧みでない遊牧民は、湖上の村の殲滅を断念し、湖畔に残された家畜を奪つただけで、また、疾風のように北方に帰つて行つた。後には、血が染んだ湖畔の土の上に、頭と右手との無い屍体ばかりが残されてゐた。頭と右手だけは、侵略者が斬取つて持つて帰つてしまつた。頭蓋骨は、その外側を鍍金して鬍髻杯を作るため、右手は、爪をつけたまま皮を剥いで手袋とするためである。シャクの弟のデックの屍体もそうした辱しめを受けて打捨てられてゐた。顔が無いので、服装と持物とによつて見分ける外はないのだが、革帯の目印と鍔の飾りによつて紛れもない弟の屍体をたずね出した時、シャクはしばらく茫々としたままその惨めな姿を眺めてゐた。その様子が、どうも、弟の死を悼んでゐるのはどこか違うように見えた、と、後でそう言つてゐた者がある。

その後間もなくシャクは妙な謔言をいうようになった。何がこの男にのり移つて奇怪な言葉を吐かせるのか、初め近処の人々には判らなかつた。言葉つきから判断すれば、それは生きなが

ら皮を剥がれた野獸の霊でもあるように思われる。一同が考えた末、それは、蛮人^{ばんじん}に斬取られた彼の弟デックの右手がしゃべっているのに違いないという結論に達した。四五日すると、シヤクはまた別の霊の言葉を語り出した。今度は、それが何の霊であるか、すぐに判った。武運拙く戦場に斃れた顛末から、死後、虚空の大霊に頸筋^{くわうしん}を掴まれ無限の闇黒の彼方かなたへ投げやられる次第を哀しげに語るのは、明らかに弟デックその人と、誰もが合点した。シヤクが弟の屍体の傍に茫然と立っていた時、秘かにデックの魂^{たま}が兄の中に忍び入ったのだと人々は考えた。

さて、それまでは、彼の最も親しい肉親、及びその右手のこゝとて、彼にのり移るのも不思議はなかったが、その後一時平静に復ったシヤクが再び讒言を吐き始めた時、人々は驚いた、今度はおよそシヤクと関係のない動物や人間共の言葉だったからである。

今までも憑きもののした男や女はあったが、こんなに種々雑多なものが一人の人間にのり移った例はない。ある時は、この部落の下の方湖を泳ぎ廻る鯉^{こい}がシヤクの口を仮りて、鱗族^{りんぞく}達の生活の哀しさと楽しさを語った。ある時は、トオラス山の隼^{はやぶさ}が、湖と草原と山脈と、またその向うの鏡のごとき湖との雄大な眺望^{ぼうぼう}について語った。草原の牝狼^{めうろう}が、白けた冬の月の下で飢えに悩みながら一晚中凍いてた土の上を歩き廻る辛さを語ることもある。

人々は珍しがってシヤクの讒言を聞きに来た。おかしいのは、シヤクの方でも（あるいは、シヤクに宿る霊共の方でも）多くの聞き手を期待するようになったことである。シヤクの聴衆は次第にふえて行ったが、ある時彼等の一人がこんなことを言った。シヤクの言葉は、憑きものがしゃべっているのではないぞ、あれはシヤクが考えてしゃべっているのではないかと。

なるほど、そう言えば、普通憑きもののした人間は、もつと恍惚とした忘我の状態でしゃべるものである。シヤクの態度には余り狂気じみた所がないし、その話は条理が立ち過ぎている。少し変だぞ、という者がふえて来た。

シヤク自身にしても、自分の近頃している事柄の意味を知ってはいない。もちろん、普通のいわゆる憑きものと違うらしいことは、シヤクも気がついている。しかし、なぜ自分はこんな奇妙な仕事を幾月にも亘って続けて、なお、倦まないのか、自分でも解らぬ故、やはりこれは一種の憑きもののせいと考えていいのではないかと思っている。初めは確かに、弟の死を悲しみ、その首や手の行方を憤ろしく思い画いている中に、つい、妙なことを口走ってしまったのだ。これは彼の作為でないと見える。しかし、これが元来空想的な傾向を有もつシヤクに、自己の想像をもつて自分以外のものに乗移ることの面白さを教えた。次第に聴衆が増し、彼等の表情が、自分の物語の一弛一張につれて、あるいは安堵の・あるいは恐怖の・偽ならぬ色を浮べるのを見るにつけ、この面白さは抑えきれぬものとなった。空想

物語の構成は日を逐うて巧みになる。想像による情景描写はますます生彩を加えて来る。自分でも意外な位、色々な場面が鮮やかにかつ微細に、想像の中に浮び上つて来るのである。彼は驚きながら、やはりこれは何かある憑きものが自分に憑いているのだと思わない訳に行かない。但し、こうして次から次へと故知らず生み出されて来る言葉共を後々までも伝えるべき文字という道具があつてもいいはずだということに、彼はいまだ思ひ到らない。今、自分の演じている役割が、後世どんな名前であ呼ばれるかということも、もちろん知るはずがない。

シャクの物語がどうやら彼の作爲らしいと思われ出してからも、聴衆は決して減らなかつた。かえつて彼に向つて次々に新しい話を作ることを求めた。それがシャクの作り話だとしても、生来凡庸なああのシャクに、あんな素晴らしい話を作らせるものは確かに憑きものに違いないと、彼等もまた作者自身と同様の考え方をした。憑きもののしていない彼等には、実際に見もしない事柄について、あんなに詳しく述べることなど、思いも寄らぬからである。湖畔の岩陰や、近くの森の樅の木の下や、あるいは、山羊の皮をぶら下げたシャクの家の戸口の所などで、彼等はシャクを半円にとり囲んで坐りながら、彼の話を楽しんだ。北方の山地に住む三十人の剽盗の話や、森の夜の怪物の話や、草原の若い牝牛の話などを。

若い者達がシャクの話に聞き惚れて仕事を怠るのを見て、部落の長老達が苦い顔をした。彼等の一人が言つた。シャクのよ

うな男が出たのは不吉の兆である。もし憑きものだとすれば、こんな奇妙な憑きものは前代未聞だし、もし憑きものでないとするれば、こんな途方もない出鱈目を次から次へと思いつく氣遣いはいまだかつて見たことがない。いづれにしても、こんな奴が飛出したことは、何か自然に悖る不吉なことだと。この長老がたまたま、家の印として豹の爪を有つ・最も有力な家柄の者だつたので、この老人の説は全長老の支持する所となつた。彼等は秘かにシャクの排斥を企んだ。

シャクの物語は、周囲の人間社会に材料を採ることが次第に多くなつた。いつまでも鷹や牝牛の話では聴衆が満足しなくなつて来たからである。シャクは、美しく若い男女の物語や、吝嗇で嫉妬深い老婆の話や、他人には威張つていても老妻にだけは頭の上がらぬ酋長の話をするようになった。脱毛期の秃鷹のよいうな頭をしているくせに若い者と美しい娘を張合つて惨めに敗れた老人の話をした時、聴衆がドツと笑つた。余り笑うのでその訳を訊ねると、シャクの排斥を發議した例の長老が最近それと同じような惨めな経験をしたという評判だからだ、と言つた。

長老はいよいよ腹を立てた。白蛇のような奸智を絞つて、彼は計をめぐらした。最近に妻を寝取られた一人の男がこの企に加わつた。シャクが自分にあてこするやうな話をしたと信じたからである。二人は百方手を尽つくして、シャクが常に部落民としての義務を怠っていることに、みんなの注意を向けようとした。シャクは釣をしない。シャクは馬の世話をしてない。シャ

クは森の木を伐らない。獺の皮を剥がない。ずっと以前、北の山々から鋭い風が鵝毛のような雪片を運んで来て以来、誰か、シヤクが村の仕事をするのを見た者があるか？

人々は、なるほどそうだと思った。実際、シヤクは何もしなかったから。冬籠りに必要な品々を頒け合う時になって、人々は特に、はつきりと、それを感じた。最も熱心なシヤクの聞き手までが。それでも、人々はシヤクの話の面白さに惹かれていたので、働かないシヤクにも不承無承冬の食物を頒け与えた。

厚い毛皮の陰に北風を避け、獸糞や枯木を燃した石の炉の傍で馬乳酒を啜りながら、彼等は冬を越す。岸の蘆が芽ぐみ始めると、彼等は再び外へ出て働き出した。

シヤクも野に出たが、何か眼の光も鈍く、呆けたように見える。人々は、彼がもはや物語をしなくなったのに気が付いた。強いて話を求めても、以前したことのある話の蒸し返ししか出来ない。いや、それさえ満足には話せない。言葉つきもすっかり色彩を失ってしまった。人々は言った。シヤクの憑きものが落ちたと。多くの物語をシヤクに語らせた憑きものが、もはや、明らかに落ちたのである。

憑きものは落ちたが、以前の勤勉の習慣は戻って来なかった。働きもせず、さりとて、物語をするでもなく、シヤクは毎日ぼんやり湖を眺めて暮くらした。その様子を見る度に、以前の物語の聴手達は、この莫迦面の怠け者に、貴い自分達の冬籠りの食物を頒けてやったことを腹立たしく思出した。シヤクに含む

所のある長老達は北叟笑んだ。部落にとつて有害無用と一同から認められた者は、協議の上でこれを処分することが出来るのである。

硬玉の頸飾を着けた鬚深い有力者達が、よりより相談をした。身内の無いシヤクのために弁じようとする者は一人も無い。

ちょうど雷雨季がやって来た。彼等は雷鳴を最も忌み恐れる。それは、天なる一眼の巨人の怒れる呪いの声である。一度この声が轟くと、彼等は一切の仕事を止めて謹慎し、悪しき氣を祓わねばならぬ。奸譎な老人は、占卜者を牛角杯二箇でもって買収し、不吉なシヤクの存在と、最近の頻繁な雷鳴とを結び付けることに成功した。人々は次のように決めた。某日、太陽が湖心の真上を過ぎてから西岸の山毛櫸の大樹の梢にかかるまでの間に、三度以上雷鳴が轟いたなら、シヤクは、翌日、祖先伝来のしきたりに従つて処分されるであらう。

その日の午後、ある者は四度雷鳴を聞いた。ある者は五度聞いたと言った。

次の日の夕方、湖畔の焚火を囲んで盛んな饗宴が開かれた。大鍋の中では、羊や馬の肉に交つて、哀れなシヤクの肉もふつふつ煮えていた。食物の余り豊かでないこの地方の住民にとつて、病気で斃れた者の外、すべての新しい屍体は当然食用に供せられるのである。シヤクの最も熱心な聴手だった縮れつ毛の青年が、焚火に顔を火照らせながらシヤクの肩の肉を頬ば張った。例の長老が、憎い仇の大腿骨を右手に、骨に付いた肉を旨

そうにしゃぶった。しゃぶり終ってから骨を遠くへ抛ると、水音がし、骨は湖に沈んで行った。

ホメロスと呼ばれた盲人のマエオニデエスが、あの美しい歌どもを唱い出すよりずっと以前に、こうして一人の詩人が喰われてしまったことを、誰も知らない。

(昭和十七年七月)

(青空文庫 底本…「ちくま日本文学 中島敦」ちくま文庫)

《参考資料 2》

木乃伊

中 島 敦

大キエロスとカツサンダネとの息子、波斯王カンビユセスが埃及に侵入した時のこと、その麾下の部将にパリスカスなる者があった。父祖は、ずっと東方のバクトリヤ辺から来たものらしく、いつまでたっても都の風になじまぬすこぶる陰鬱な田舎者である。どこか夢想的な所があり、そのため、相当な位置にいたにもかかわらず、いつも人々の嘲笑を買っていた。

波斯軍がアラビヤを過ぎ、いよいよ埃及の地に入った頃から、このパリスカスの様子の異常さが朋輩や部下の注意を惹きはじめた。パリスカスは見慣れぬ周囲の風物を特別不思議そうな眼付で眺めては、何か落著かぬ不安げな表情で考え込んでいる。何か思出そうとしながら、どうしても思出せないらしく、いらしている様子がはつきり見える。埃及軍の捕虜共が陣中に引張られて来た時、その中のある者の話している言葉が彼の耳に入った。しばらく妙な顔をして、それに聞入っていた後、彼は、何だか彼等の言葉の意味が分るような気がする、と、傍の者に言った。自分でその言葉を話すことは出来ないが、彼等の話す

言葉だけは、どうやら理解できるようだ、というのである。パリスカスは部下をやつて、その捕虜が埃及人か、どうか（というのは、埃及軍の大部分は希臘人その他の傭兵だったから）を尋ねさせた。たしかに埃及人だという返辞である。彼はまた不安な表情をして考えに沈んだ。彼は今までに一度も埃及に足を踏入れたこともなく、埃及人と交際をもったこともなかったのである。激しい戦の最中にあつても、彼は、なお、ぼんやりと考えこんでいた。

敗れた埃及軍を追うて、古の白壁の都メムフィスに入城した時、パリスカスの沈鬱な興奮は更に著しくなつた。癲癇病者の発作直前の様子を思わせることもしばしばである。以前は啜っていた朋輩達も少々気味が悪くなつて来た。メムフィスの市はずれに建っている方尖塔の前で、彼はその表に彫られた絵画風な文字を低い声で読んだ。そして、同僚達に、その碑を建てた王の名と、その功業とを、やはり、低い声で説明した。同僚の諸将は、皆、へんな気持になつて顔を見合せた。パリスカ自身もすこぶるへんな顔をしていた。誰も（パリスカ自身も）、今までパリスカスが埃及の歴史に通じているとも、埃及文字が読めるとも、聞いたことがなかったのである。

その頃から、パリスカスの主人、カンビュセス王も次第に狂暴な瘋癲の氣に犯され始めたようである。彼は埃及王プサメトリスに牛の血を飲ませて、これを殺した。それだけでは憐焉たらず、今度は、半年前に崩じた先王アメシスの屍を辱しめよう

と考えた。カンビュセスが含む所のあつたのは、むしろアメシス王の方だったからである。彼は自ら一軍を率いて、アメシス王の廟所のあるサイスの市に向つた。サイスに着くと、彼は、故アメシス王の墓所を探出し、その屍を掘出して、己の前に持つて来るよう、一同に命令した。

かねてかかる事のあるべきを期していたものとみえ、アメシス王の墓所の所在は巧みに晦まされていた。波斯軍の将士はサイス市内外の多数の墓地を一つ一つ発いて検めて歩かねばならなかつた。

さて、パリスカスも、この墓所搜索隊の中に加わつていた。他の連中は、埃及貴族の木乃伊と共に墓に納められた無数の寶石、装身具、調度類の掠奪に夢中になつていたが、パリスカスだけは、そんなものには目もくれず、相変らず沈鬱な面持で、墓から墓へと歩き廻つていた。時々その暗い表情のどこかに、曇天の薄れ陽のような明るみが射しかけることもあるが、それはすぐに消えて、また、元の落著のない暗さに戻つてしまう。心の中に、何か、ある、解けそうで解けないものが引掛つていような風である。

搜索を始めてから何日目かのある午後、パリスカスは、たった一人で、ある非常に古そうな地下の墓室の中に立っていた。いつ、同僚や部下と、はぐれてしまったものか、この墓は市どの方角に当るものか、それらは、まるで判らない。とにかく、いつもの夢想から醒めて、ひよいと氣が付いてみたら、たつた

一人で古い墓室の薄暗がりの中にいた、というより外はない。

眼が暗さに慣れるにつれ、中に散乱した彫像、器具の類や、周囲の浮彫、壁画などが、ぼうつと眼前に浮上つて来た。棺は蓋を取られたまま投出され、埴輪人形の首が二つ三つ、傍にころがっている。既に他の波斯兵の掠奪にあつた後であることは、一見して明らかである。古い埃のにおいが冷たく鼻を襲う。闇の奥から、大きな鷹頭神の立像が、硬い表情でこちらを覗いている。近くの壁画を見れば、豺や鰐や青鸞などの奇怪な動物の頭をつけた神々の憂鬱な行列である。顔も胴もない巨きな眼が一つ、細長い足と手を生やして、その行列に加わっている。

パリスカスはほとんど無意識に足を運ばせて奥へ進んだ。五六歩行くと、彼は蹣跚した。見ると、足許に木乃伊がころがっている。彼は、またほとんど何の考えもなしにその木乃伊を抱起して、神像の台に立掛けた。数日来見飽きるほど見て来た平凡な木乃伊である。彼は、そのまま、行過ぎようとして、ふとその木乃伊の顔を見た。途端に、冷熱いずれともつかぬものが、彼の脊筋を走った。木乃伊の顔に注いだ視線を、もはや外らすことが出来なくなった。彼は、磁石に吸寄せられたように、凝乎と身動きもせず、その顔に見入った。

どれほどの長い間、彼はそこに、そうしていたろう。

その間に、彼の中に非常な変化が起つたような気がした。彼の身体を作上げている、あらゆる元素どもが、彼の皮膚の下で、物凄く（ちようど、後世の化学者が、試験管の中で試みる実験

のように）泡立ち、煮えかえり、その沸騰がしばらくして静まつた後は、すっかり以前の性質と變つてしまつたように思われた。彼は大変やすらかな氣持になつた。氣がつくと、埃及人國以来、氣になつて仕方のなかつたこと——朝になつて思出そうとする昨夜の夢のように、解りそうできて、どうしても思出せなかつたことが、今は実に、はつきり判るのである。なんだ。こんな事だつたのか。彼は思はず声に出して言つた。「俺は、もと、この木乃伊だつたんだよ。たしかに。」

パリスカスがこの言葉を口にした時、木乃伊が、心持、臂の隅をゆがめたように思われた。どこから光が落ちて来るのか、木乃伊の顔の所だけ灰明るく浮上つていて、はつきり見えるのである。

今や、闇を劈く電光の一閃の中に、遠い過去の世の記憶が、一どきに蘇つて来た。彼の魂がかつて、この木乃伊に宿つていた時の様々な記憶が。砂地の灼けつくような陽の直射や、木蔭の微風のそよぎや、氾濫のあとの泥のにおいや、繁華な大通を行交う白衣の人々の姿や、沐浴のあとの香油の匂や、薄暗い神殿の奥に跪いた時の冷やかな石の感触や、そうした生々しい感覺の記憶の群が忘却の淵から一時に蘇つて、殺到して来た。

その頃、彼はプターの神殿の祭司でもあつたのだらうか。だらうか、と云うのは、彼のかつて見、触れ、経験した事物が今彼の眼前に蘇つて来るだけで、その頃の彼自身の姿は一向に浮かんでこないからである。

ふと、自分が神前に捧げた犠牲の牡牛の、もの悲しい眼が、浮かんで来た。誰か、自分のよく知っている人間の眼に似ているなどと思う。そうだ。確かに、あの女だ。たちまち、一人の女の眼が、孔雀石の粉を薄くつけた顔が、ほっそりした身体つきが、彼に馴染のしぐさと共に懐かしい体臭まで伴って眼前に現れて来た。ああ懐かしい、と思う。それにしても夕暮の湖の紅鶴のような、何と寂しい女だろう。それは疑もなく、彼の妻だった女である。

不思議なことに、名前は、何一つ、人の名も所の名も物の名も、全然憶出せない。名の無い形と色と匂と動作とが、距離や時間の観念の奇妙に倒錯した異常な静けさの中で、彼の前にたちまち現れ、たちまち消えて行く。

彼はもはや木乃伊を見ない。魂が彼の身体を拔出して、木乃伊に入ってしまったのであろうか。

また、一つの情景が現れる。自分は酷い熱で床の上に寝ているらしい。傍には妻の心配そうな顔が覗いている。その後には、まだ誰やら老人らしいのや子供らしいのがいる様子である。ひどく咽喉が渇く。手を動かすと、すぐに妻が来て、水を飲ませてくれる。それからしばらく、うとうとする。眼が覚めた時は、もうすっかり熱がひいている。うす眼をあけて見ると、傍で妻が泣いている。後で老人達も泣いているようだ。急に、雨雲の陰が湖の上をみるみる暗く染めて行くように、蒼い大きな翳が自分の上にかぶさって来る。目の眩むような下降感に思わず眼

を閉じる。――

そこで彼の過去の世の記憶はぶつ切り切れている。さて、それから幾百年間の意識の闇が続いたものか、再び気が付いた時は、(すなわち、それは今のことだが)一人の波斯の軍人として、(波斯人としての生活を数十年送った後)己のかつての身体の木乃伊の前に立っていたのである。

奇怪な神秘の顕現に慄然としながら、今、彼の魂は、北国の冬の湖の水のように極度に澄明に、極度に張りつめている。それはなおも、埋没した前世の記憶の底を凝視し続ける。そこには、深海の闇に自ら光を放つ盲魚共のように、彼の過去の世の経験の数々が音もなく眠っているのである。

その時、闇の底から、彼の魂の眼は、一つの奇怪な前世の己の姿を見付け出した。

前世の自分が、ある薄暗い小室の中で、一つの木乃伊と向い合って立っている。おののきつつ、前世の自分は、その木乃伊が前々世の己の身体であることを確認せねばならない。今と同じような薄暗さ、うすら冷たさ、埃っぽいにおいの中で、前世の己は、忽然と、前々世の己の生活を思出す……

彼はぞつとした。一体どうしたことだ。この恐ろしい一致は。怯れずになお仔細に観るならば、前世に喚起した、その前々世の記憶の中に、恐らくは、前々世の己の同じ姿を見るのではなからうか。合せ鏡のように、無限に内に畳まれて行く不気味な記憶の連続が、無限に――目くるめくばかり無限に続いてい

るのではないか？

パリスカスは、全身の膚に粟を生じて、逃出そうとする。しかし、彼の足は、すくんでしまう。彼は、まだ木乃伊の顔から眼を離すことが出来ない。凍ったような姿勢で、琥珀色の干涸らびた身体に向いあつて立っている。

翌日、他の部隊の波斯兵がパリスカスを発見した時、彼は固く木乃伊を抱いたまま、古墳の地下室に倒れていた。介抱されてようやく息をふき返しはしたが、もはや、明らかな狂気の徴を見せて、あらぬ譫言をしゃべり出した。その言葉も、波斯語ではなくて、みんな埃及語だったということである。

（昭和十七年七月）

底本…「ちくま日本文学 中島敦」ちくま文庫、筑摩書房

二〇〇八（平成二〇年刊）

「青空文庫」より

ただし、振り仮名については適宜省略した。

【編集後記】

2026年2月に行われた衆議院議員選挙は高市早苗総理率いる自由民主党の歴史的な大勝、立憲民主党と公明党が合同した中道改革連合の惨敗という結果に終わった。事前の予想でも自由民主党は300議席以上を確保するとされていたが、完膚なきまでの圧勝だった。普段はSNSをほとんど活用しない私であるが、若い世代の自由民主党への投票行動は、というよりも高市総理への「押し活」には違和感をもった。閉塞感の打破には、中道改革連合の不景気面の連舞より威勢のいい女独舞に期待したという面もあったのだろう。

今回の選挙ほど選択肢が少ない選挙も珍しい。原発ゼロ賛成、辺野古移転反対、軍事費拡大反対という意見の持ち主が選挙マツチングアプリを使うと、「あなたの考えに一番近いのは日本共産党、社会民主党です」という結果になる。日本共産党も社会民主党も万年最下位のサッカーチームのようなもので、この国を変える原動力にはなりそうにない。日本の左翼も、昔の名前であっているだけではだめなので、やりようによつてはヨーロッパ流の社会民主主義的な政策を主導する政党になる素地はあるし、それに日本共産党も一度くらいは本気を出して、日本で実現が可能で有権者の賛同が集まるような政権構想を示してもいいんじゃないかと思う。

自由民主党の政権運営はこの30年間、経済成長も生活水準の向上も労働者の雇用拡大・収入増も成果として出していない。政治は結果責任というが、その責任を全く果たしてこなかったのが自由民主党の政治である。しかも彼らはこの30年間の沈滞を反省するそぶりさえ見せない。何が原因かもわかっていないのだろう。その間にいちばん割を食っているのが今の40代以下の世代である。選挙は本来、政権与党は実績の評価、野党は公約で選択されるべきである。有権者の審判というのはそういうものであり、そうであるべきなのだが、日本ではそうっていない。選挙となるとどの政党も公約合戦、空手形の乱発に等しい選挙戦になり、有権者もどっちの水が甘いか云々で、今回の選挙はといえば公約はどこかに行つてしまい、高市総理を信任するか否かが争点となるという珍しい選挙になった。政権与党が達成した成果をしっかり見せるような通知表のようなものはないのだろうか。公約は公約、選挙が終わったらしばらく安泰で知らん顔を決め込み、また選挙が始まったら新しい公約と選挙の顔をすげ替える。その繰り返しが日本の政治であつた。

にもかかわらず自由民主党の政治が継続するのは、野党側が日本の将来ビジョンも、政権交代の受皿となる野党連合という枠組みも、つまらない差異にこだわって示すことができていないからで、政権批判に終始してきたこれはかつての社会党時代からの80年間のつけが回ってきたのだろう。国会の予算委員

会を舞台にした裏金問題の追及や週刊誌ネタのスキャンダルでそれ見たことかと嬉しそうに口角から泡を飛ばすパフォーマンスはいい加減にやめて、本来の政策課題をまじめに討議する場にすべきである。スキャンダルの追及が野党にとってそんなに大事な問題なら、特別委員会でもなんでも作ればいいだけの話で、予算委員会は、例えば消費税減税を実施するとどんなことが起こり、我々の生活にどんな影響が及ぶか、与野党ともそれぞれの政策をきちんとデータで示して説明すべきである。

高市新政権は、食品の消費税ゼロを公約にたてたのだから実現を果たすべく努力するであろう。さらに成長分野への投資と称する積極財政（お世話になった業界の皆様へのいいバラマキと読み替えた方がわかりやすい）を進めるであろう。高市総理の信条である積極財政が日本の将来にどんな影響をもたらすかわからないが、借金を垂れ流して栄えた国はないことだけは確かであり、日本だけが例外というわけにはいかないことも確かである。長期金利と為替の動向が日本経済を左右するという本質的な脆弱さを抱えたまま日本の舵を取る高市船長の行く手には、タイタニック号の幻影が見え隠れするように思われる。

（遠藤）

羽子板や隣バナナの笑い顔

【会合案内】

編集会議：2026年3月27日（金） 於名古屋（予定）

Figures 2026年2月号（No.3）

頒価500円（送料込）

2026年2月28日発刊

編集発行人 遠藤雅樹

発行所 (有) デジタルリサーチ

〒460-0008 名古屋市中区栄 2-10-19 名古屋商工会議所ビル 11F

TEL：052-221-6616 / landsendlive@gmail.com

印刷 (株) 東海共同印刷

Digital Research Institute, Inc.